Akita University

[秋　田　大　学
教養基礎教育研究年報
1 － 27　(2010)]

教養基礎教育科目「総合ゼミ・講座E・文化にみられる性」の3年間の実践報告

石井　照久・立花　希一・望月　一枝

Report of practice of "Gender and Sex in Culture" course as one of Special Seminar courses in University General Education

Teruhisa ISHII, Kiichi TACHIBANA, and Kazue MOCHIZUKI

平成19(2007)年より毎年前期に開講されている教育文化学部の基礎教育科目「総合ゼミ」は，5つの講座からなっている。今回はそのうちの1つの講座である講座Eの3年間の実践を紹介する。講座Eのメインテーマは「文化にみられる性」であり，担当する教員の学問分野は，動物発生学，倫理学，家庭科教育学・ジェンダー学と多岐にわたっており，3年間の授業で9つの研究テーマを指導したので報告したい。

In 2007 "Special Seminar" was newly opened as a subject in General Education. Since then it was opened three times. Special Seminar consists of five courses. "Gender and Sex in Culture" course is one of them. In this paper we shall report the practice of this course.

はじめに

平成19（2007）年から開講されている教育文化学部教員分野横断型授業「総合ゼミ」（2単位）は，教育文化学部の基礎教育科目の選択必修の科目群の1つであり，これまでに3回開講された。本授業科目の新設の経緯・概要・授業形態，実際の2回の授業運営などについては石井（2009）の報告に詳しいが，簡単に本授業科目の内容を紹介したい。本授業科目は教育文化学部の複数の教員による非オムニバス形式の実践的科目である。教員は2－3名で1つの講座を作り，その講座に学生が所属して実践的な活動を行う。各講座は学生が興味関心を抱くような研究テーマをそれぞれにかかげ，初回の授業で学生がどの講座に所属するかを選択する。その後は所属講座ごとに研究テーマに沿って実践的な活動を進め，途中経過を全体の中間発表会で報告し，他講座所属教員などから教示を受けさらに実践的に研究活動を続ける。そして研究成果をまとめ，全体の最終発表会で研究発表をするのである。平成19（2007）年から毎年5講座が店を広げている。本報告は，「総合ゼミ」での5講座の1つ，講座E「文化にみられる性」の3年間の実践報告である。講座E「文化にみられる性」は3名の教員で構成されている。各教員の専門分野は，動物発生学（石井照久），倫理学（立花希一），家庭科教育学・ジェンダー学（望月一枝）と多岐にわたっており，平成19（2007）年には「総合ゼミ」受講者全72名中24名が，平成20（2008）年には全7名中6名が，平成21（2009）年には全30名中4名が，それぞれ講座Eを選択し活動を行った。そして過去3年間で指導した研究テーマは9つにのぼった。

講座E「文化にみられる性」のコンセプト

講座Eのコンセプトはずばり「性」である。「性」にまつわる事象・問題を生物学的側面から，倫理学的側面から，言語学的側面から，宗教的側面から，ジェンダー的側面からあるいは家政学的側面

Akita University

から多面的に捉えてみようというのがコンセプトであり，各側面から多面的に捉えることのできる専門分野を背景に備えた教員３名で構成されている。

一般に研究テーマを設定する場合，教員があらかじめ決めておいた研究テーマをいくつか掲げ，学生に選んでもらう場合（あるいは１つの決め打ちテーマを提示する場合もある）とそうでない場合がある。どちらの場合にも教育上のメリットとデメリットが考えられる。前者のメリットは，教員が設定しているテーマであるため，テーマについての目的と研究のゴールがしっかりしている。そのため教育指導はそんなに困難ではない。しかし学生が自分で設定したテーマでないので，学生の活動が積極性に欠けることがあるかもしれない。後者の場合は，学生の活動の積極性は大いに期待できるものの，研究のゴールがどうなるか，未知数が多い。そのため学生の興味を収斂させていく指導が大変である。実は講座Eでは後者のスタイルをとっている。教員はテーマ設定のきっかけを示すのみであり，最終的な研究テーマ設定は学生の発想と問題意識によることにした。この方法は学生のより主体的な活動の担保であると同時に，よい研究テーマ選びの難しさを体得してもらえる。研究テーマを設定することはおそらく研究の成功の３割程度を占めているといえるのではないだろうか。研究テーマ設定は重要な研究プロセスの１つと考え，講座Ｅでは研究テーマを学生に設定してもらい，教員が相談に乗るというスタイルを３年間変えていない。

研究テーマ決定の実際のプロセス

平成19（2007）年の総合ゼミの全体の受講人数は72名であった。初回の全体ガイダンスと各講座紹介の結果，24名が講座Ｅに所属することになった。また平成20（2008）年の総合ゼミの全体の受講人数は７名であった。平成19年と同様に初回の全体ガイダンスと各講座紹介の結果，６名が講座Eに所属した。平成21（2009）年の総合ゼミ全体の受講人数は30名であり，同様の初回授業の結果，４名が講座Eに所属した。

平成19年の研究テーマ決定プロセス：まず講座ごとの活動に入ってから講座所属の３名の教員がそれぞれ，自分の興味関心のある領域を受講生に提示した。その後，24名の受講生に「生物の性」「生活と性」「宗教と性」のキーワードでチームをつくってもらった。さらにその３つのチーム内で討論をしてもらい，どのような研究を行いたいか，話しあってもらった。そのところ，「生物の性」チームはさらに２つに分かれた。また「生活と性」のチームも２つに分かれた。「宗教と性」のチームはそのまま１つのチームを形成した。「生物の性」チームは，最初「行動から見る男女の脳の構造」と「生物の進化における性の必要性」という２つのテーマに沿って２チームを形成した。その後，各テーマに沿って実践研究を行ったり，研究成果を授業中に発表し他チームからの意見をもらったりして，それぞれ「男性脳と女性脳」「生物と性」というテーマに落ち着き，全体での（５講座のすべての研究チームが集まり発表を行った）中間発表会に臨んだ。そして中間発表会での討論を踏まえ，最終的に，「性格・行動に男女差はあるのだろうか？」「大学周辺の土壌動物の性」というテーマにたどりついた。「生活と性」における２チームのテーマも「古代からの男女の性差」（授業初期）→「文化にみられる性～モテる女の変遷～」（中間発表会時）→「秋大生の考える理想の女性像・男性像」（最終）と変遷し，もう１つのチームも「建物から見たジェンダー」（授業初期）→「生活空間から見るジェンダー」（中間発表時と最終）と変遷した。「宗教と性」チームのテーマは初期には「一神教からみるジェンダー」であったが，「キリスト教にみられるジェンダー」（中間発表時と最終）に変遷した。

平成20年の研究テーマ決定プロセス：平成19年と同様に，まず講座ごとの活動に入ってから講座所属の３名の教員がそれぞれ，自分の興味関心のある領域を受講生に提示した。その結果６名の受講生の興味関心が，生物分野，ジェンダー分野，言語分野の３つに，それぞれ２名ずつに分かれたので，３チームを作成することにした。各チームのメンバーがそれぞれ２名となり，平成19年の４－５名と比べると少なく，その分，一人一人の活動量は多くなることが予想されたが，受講生の興味関心とやる気を第一に考え，３チームとした。３チームはそれぞれ「男女の行動の違い」「逆ジェンダー」「男言葉と女言葉」をキーワードに活動を開始し，中間発表時にそれぞれ「男女の考え

Akita University

方・行動の違い」「男性からみたジェンダー問題」「人」という演題で発表を行った。そして最終的にそれぞれ「男女に考え方・行動の違いはあるのか？」「自殺にひそむジェンダー問題」「ことばとジェンダー」に確定した。

平成21年の研究テーマ決定プロセス：受講生が4名であったため，はじめから１チームのみ構成することに決め，受講生にもその旨を伝えた。そして受講生全員の興味関心を提示してもらったのち，受講生と教員で討論を重ね「衣服にみられるジェンダー」をテーマにした（中間発表時まで）。その後，内容をさらに絞り込み「学生のスーツにみられるジェンダー　－入学式・教育実習・就職活動－」に確定した。

講座Eで学生自身が設定し取り組んだ最終テーマと学生名（所属課程名；選修名）

学生名は敬称略で表記し，学生の所属課程名については，地域科学課程は地域，国際言語文化課程は国際，人間環境課程は人間，とそれぞれ略して記載する。また所属選修名についても政策科学選修を政策，生活者科学選修を生活，日本・アジア文化選修を日ア，欧米文化選修を欧米，国際コミュニケーション選修を国コミ，自然環境選修を自然，とそれぞれ略して記載する。以下をみてもらうとわかるように，各研究チームともに，多様な所属課程・所属選修の学生から形成されている。このように普段あまり同じ授業を受講する機会のない学生同士が１つの研究テーマのもと，チームを作ると互いによい刺激となる。このことは総合ゼミの特徴でもある。

平成19年

性格・行動に男女差はあるのだろうか？

嶋崎由佳子（国際；欧米）・保坂真理（国際；日ア）・三宅朝子（国際；欧米）・佐藤大地（人間；自然）・増田史治（人間；自然）

大学周辺の土壌生物の性

佐野彰紀（地域；政策）・鈴木雄太（地域；生活）・三浦健太郎（地域；政策）・小綿華苗（国際；欧米）・高橋麻深子（人間；自然）

秋大生の考える理想の女性像・男性像

大山愛（地域；生活）・田畑志帆（地域；政策）・古川ちひろ（地域；政策）・矢嶋沙織（地域；政策）・佐藤かすみ（人間；自然）

生活空間から見るジェンダー

大津彩（国際；欧米）・佐藤千夏（国際；欧米）・菅野里美（国際；日ア）・村井沙耶佳（国際；欧米）・本山未菜子（国際；国コミ）

キリスト教にみられるジェンダー

伊藤梢（人間；自然）・片山美穂（人間；自然）・佐々木愛（人間；自然）・千葉優（人間；自然）

平成20年

男女に考え方・行動の違いはあるのか？

大久真澄（国際；日ア）・山下直輝（人間；自然）

自殺にひそむジェンダー問題

米澤百合乃（国際；日ア）・鈴木紳一郎（人間；自然）

ことばとジェンダー

安中妙（国際；日ア）・佐々木佑太（人間；自然）

平成21年

学生のスーツにみられるジェンダー－入学式・教育実習・就職活動－

谷村生（国際；欧米）・張成日（地域；政策）・白木澤二枝（国際；国コミ）・三浦歌織（国際；国コミ）

授業展開

総合ゼミの授業では，受講学生・担当教員の全員が一同に集まって行う回は，授業初回の全体ガイダンス，授業中盤の中間発表会，授業最後の最終発表会，の３回である（実際の授業日程などは石井（2009）をご覧下さい）。このスタイルは３年間変わっていない。全体で行う３回以外が各講座での活動となっている。「講座Ｅ・文化にみられる性」では，講座活動での初回に，講座所属の３名の教員がそれぞれ自分の興味関心を受講生に提示し，それに基づいて受講生に研究チームを作成してもらった。各研究チームは，研究テーマの絞り込みとそれに伴う調べ学習・研究を進めた。そしてその成果を次の授業時間に発表する，というスタイルをとった。

授業では，各研究チームが成果（テーマに沿っ

Akita University

た研究の成果）をその都度発表し，担当教員と受講生全員で，設定された研究テーマの是非や研究成果について議論を重ねた。また，各研究チームは研究方法について，また研究の方向性についてもアドバイスをもらった。また全体での中間発表会も，各研究チームに有効なアドバイスを与え，知的探究心をかりたてたのだと思われる。そうした中で，上記の研究テーマ決定のプロセスで述べたように，各研究チームのテーマは変遷し決定されていった。

担当している教員３名の仕事は，自分の分野の知見や思考方法を伝授すること，インタビューの方法とその処理方法を伝授すること，統計処理の方法を伝授すること，レジメ作成・プレゼンテーション作成を伝授すること，プレゼンテーション手法を伝授すること，などが主であり，あとは受講生らの研究テーマに沿った成果について，あれやこれやと勝手な意見を述べ，ある時はフィールドワークをサポートする，というのが仕事であった。基本的には，受講生の知的意欲によって授業が展開されていった。そのため，各チームは授業時間以外でも集まれる時に自主的に集まり，研究活動を進めていった。もともと総合ゼミは座学の授業ではなく，学生が自ら積極的に学ぶ「学生活動型」を目指しており，本講座も（他の講座はもちろん）その目的を十分に達成していた。

研究成果

講座Eでは過去３年間で受講生が９つのテーマに取り組んだので，各テーマについて簡単に成果を述べていきたい。また，各チームが最終発表会要旨集に掲載した研究成果（レジメ）を資料１から資料９として掲載した（最終発表会要旨集の体裁とやや異なるものがあるが内容は同じである）。

研究テーマ「性格・行動に男女差はあるのだろうか？」（資料１）

日常生活における男女の行動や，恋愛面でおこる男女の考え方の違いに興味を持ったこのチームは，文献調査で男女差を調べた後，秋田大学生にアンケート調査を実施した。アンケート調査においては，どのような質問項目を立てるか，どのように解析するか，がポイントなる。チームは一般的に男性寄り，女性寄りとされている性格・行動に関する10個の質問を独自に作成し，秋田大学生91名（男子38名，女子53名）にアンケート調査を実施した。また，その結果を統計的に処理し，『行きたい場所があり，地図を見ているとき，進行方向が上になるように回転させながら見ることがある』および『口論になるとつい感情的になる』という質問項目が女性に特有な性格・行動であることを見出した。また『子供の頃，国語よりも算数や数学のほうが得意だった』という質問項目が男性に特有な性格・行動であると見出した。

男女差を決めている要因は，遺伝，脳の構造，社会性や文化，育った環境，など様々が考えられ，どれも影響を及ぼすものの，性差を生み出す詳細なメカニズムは明らかになっているわけではない。このチームは，男女の性格・行動の性差という難しいテーマに取り組み，自分たちなりに日頃感じている性差について，研究を進めながら理解を深めていったとともに，身近な大学生にアンケート調査を行った。そして友人たちの中にも男女差が認められることを突き止め，さらに男女差が一義的に決まるものではないことを理解したと思われる。

研究テーマ「大学周辺の土壌生物の性」（資料２）

人間以外の生物の性について興味をもったこのチームは，生物における雌雄同体・雌雄異体・雌雄が無い，などについて調べを進めていった。そして性転換・性決定について判明している生物の事例についても調べを進めた。そういった中で人間とは違う方法で子孫を残している生物たちがいるのに気が付いた。さらに自分たちの身の周りの生活空間にもそういった生物が本当にいるのかに興味が向いていった。そして秋田大学内と大学の近くの手形山で実際に生物を採集して調べることを行うことにした。チームと教員とで相談した結果，季節変化を受けにくく，比較的採集が容易である，土壌生物を調査対象とすることとなった。しかしチームメンバーで生物に明るい者は皆無であること，また，採集した土壌生物を，顕微鏡を用いて仕分けしたり，同定したりする作業は忍耐と困難さ伴うものであることなどから，教員サイドは苦戦を予想していた。しかしチームメンバー５名（うち２名は女子）とも放課後などを利用して顕微鏡に向かい，一生懸命に解析を行っていた。

Akita University

実際には秋田大学構内の３か所と手形山1か所から土壌を採集し，ツルグレン装置（顕微鏡サイズの土壌生物を土から分離する装置）を用い，肉眼的サイズの生物と顕微鏡サイズの生物の両方を採集し解析した。そして大学構内と手形山の生物相に違いがないこと，身近な環境にも雌雄同体生物のミミズや単為発生をするアザミウマが生息しており，人間とは違う子孫繁栄をしていることを実感した。

このチームは環境の違いによる性体系の変化も見出そうとしていたが，それを見つけることはできなかった。しかし，これまでに顕微鏡を使ったことのないメンバーたちが，実際に自分たちの手で生物を採集し，観察・解析したことはメンバーにとっても有意義であったし，担当する教員にとっても新鮮であった。さらには大学構内で沢山の土壌生物が採集できることを担当教員も知ることができ，教員自身の今後の研究テーマの候補ともなった。

研究テーマ「秋大生の考える理想の女性像・男性像」（資料３）

研究開始当初は，平安・江戸・現代の女性の地位の変化に取り組んでいたこのチームは，中間発表を踏まえ，現代の男女の理想像に焦点をあてることとした。そして秋田大学生を対象に理想の女性像・男性像のアンケート調査を行った。アンケート調査を実施するにおいては先にあげたポイントがある。アンケートでは，『夫婦観』，『両親の労働日数や労働時間』，『理想の異性像』，『理想の異性像をつくる要因』について調査した。この調査では，女子学生から見た理想の男性像のみならず，男子学生から見た理想の男性像も調査しており，同様に男子学生から見た理想の女性像，女子学生から見た理想の女性像も調査している点がユニークである。

その結果，男女学生共に理想女性には優しさを求めていることを明らかにした。そして女子学生自身は自立を望み，男子学生は女性を守ろうとしていると解析している。理想男性では，男女学生で意見が異なり，女子学生は理想男性に優しさや包容力を求めるのに対し，男子学生は収入が多いことを重要視していた。そして女子学生は男性にあまり経済力を求めていないが，男子学生は経済力を必要と感じていることも明らかにした。このことは，女性の社会進出がごく普通になっている時代にもかかわらず男性が家庭を支える，といった固定意識が強いことをうかがわせる。ただこれは秋田大学生という集団の特徴であるのかもしれない。夫婦観調査では，女子学生は親の夫婦観は不平等であると否定的に見ており，平等を望んでいる。それに対し男子学生は親の夫婦観は比較的平等と見ており，なんら問題意識はなかった。そこでチームはこの夫婦観の食い違いをどう埋めていくかが問題であるとしている。また理想像観形成には，親の夫婦観のみならず，友人からの影響，さらにはメディアの影響が大きいことを指摘し，学校教育でのジェンダー視点でメディアを読み解く教育の重要性も指摘している。このチームは大学生の理想の女性像・男性像を浮き彫りにしたのみならず，その像を形成する要因についても考察を重ね，自分たちの価値観がどこに由来するのか，理解を深めたものと思われる。また指摘しているジェンダー視点によるメディア・リテラシーの教育は我々に与えられた課題となった。

研究テーマ「生活空間から見るジェンダー」（資料４）

建物においてどのようなジェンダーが存在するのかをテーマにしたこのチームは，男女で使用するのが異なる生活空間でのジェンダーを題材にした。そのメインはトイレであった。秋田駅付近のデパートや映画館，秋田大学内のトイレを調査し，また便器メーカーの企業に直接インタビューをして，トイレの色，音姫（用を足す音を紛れさせるための音源装置）などについて調査を行った。また秋田大学生にもアンケート調査を実施した。

実際のトイレ調査において，洗面台の数の割合に面白い傾向が現れた。すなわち，女性客が主に集まるデパートに設置されている女性トイレでは，便器のある個室数（５つ）に対する洗面台の数（６台）の割合が，男女ともに集まると思われる映画館における便器のある個室数（８つ）に対する洗面台数（６台）の割合に比較して高いことがわかった。男性トイレでは，その逆に映画館におけるほうが，その割合が高かった。さらに，男性トイレと女性トイレの床や壁の色に特色があること（男性トイレはブルーなどの寒色系が多く，

Akita University

女性トイレは赤などの暖色系が多い）を見出した。また，大学内では工学資源学部の男子学生の割合が高いので，男子トイレが多く設置されている，という一見当たり前のトイレ数に生活空間におけるジェンダーを読み取った。すなわち，工学資源学部の女子学生は，教育文化学部の女子学生より，トイレに関して不便であるという事実である。また，数が少ない工学資源学部の女子トイレに「男子学生は入らないように」という注意書きがあることに気づき，女子が少ないので，男子学生が使ってしまうことなどにも気づいていった。そのため大学内では，洗面台数の割合を一概に比較することはできなかった。チームはこのように単にトイレの数を調査するだけでなく，女子用トイレの洗面台数の割合が高いことや色使いにも着目し，さらにはそのことをトイレ設置者やトイレ便器メーカーにインタビューを行い，検証した。

そして，大学生へのアンケート調査結果からも，トイレ事情からも，まだまだ現代生活にはジェンダーが残っている事に気付いた。さらに，全てを画一的にすることではなく，人間が心地よく過ごせるために，両性にとって公平・平等な生活空間にすることが大切であると結論している。

研究テーマ「キリスト教にみられるジェンダー」（資料５）

もともとキリスト教に絞って研究を進めていたわけではなく，広く宗教を調べ，そこにジェンダー問題が存在するのかどうかを調査していた。宗教には，一神教，多神教があるが，それぞれにおいて神の性はどうなっているのかを調べることによって，宗教におけるジェンダー問題を浮き彫りにしようと試みていた。その過程で一神教の神には性がないはずなのに，キリスト教の聖書には神を男性であるかのような記載があることを知り，女性差別がキリスト教に存在するのかもしれない，とキリスト教を深く追求することになった。キリスト教の聖書では，『父なる神』や『神の息子』という表現が存在するため，その他の部分にも女性を差別する記述が存在するかどうかを調べた。またカトリックでは女性は聖職者になれないこと，パウロの手紙には女性差別と思える記述があること，に疑問を持ち，キリスト教の教会の方に直接うかがってみた。教会の方に，直接ジェンダー問題を尋ねて回答を得ることは，一般的にはとても困難であるが，立花の紹介により，教会訪問が実現し，チームは教会の方から直接お話しを伺うことができた。それにより女性差別があること，それを現在は克服しようと努力していることを理解した。

このように文献調査や教会でのインタビューを経て，キリスト教にみられる女性差別は，キリスト教の思想や制度によるものではなく，人々に無意識に植え付けられている女性差別・男性優位な社会環境などが主な原因であるとの結論に達した。また女性差別はキリスト教だけに見られるものではないことから，当たり前だと思われること（たとえば牧師は男性が当たり前）に疑問を持ち，改善に努めることは（その努力の先に女性牧師が誕生した），宗教に見られるジェンダー問題の解決のみならず，他のジェンダー問題の解決にも重要であることをチームメンバーは実感した。

研究テーマ「男女に考え方・行動の違いはあるのか？」（資料６）

平成19年の研究テーマに類似したものであるが，このチームはその研究成果を踏まえ，男女での考え方・行動の違いについて研究することとした。特にこだわったのは，人が何か問題や障害に直面した時，男女で処理方法に違いが現れるのかどうか，を解明することであった。もし男女で処理方法に違いがあれば，それを踏まえていれば男女ともによりよく相手を理解することができ，スムーズに人付き合いできるのでは，とメンバーは期待していたのである。方法は秋田大学生，男子73名，女子75名，合計148名を対象にしたアンケート調査である。また平成19年のアンケート調査では，大学生になるまでの育ち方に関する環境要因を分析する質問項目がなかったため，きょうだい構成，出身校が男子校か女子校か共学かどうか，小さい頃の育てられ方，小さい頃のおもちゃ，などを尋ねることにした。また男女で違いがあると思われる考え方や行動に関する質問項目に加え，嫌なことがあった日の処理の仕方，ストレスの解消方法などを質問した。

その結果，小さい頃に「男の子だから～」「女の子だから～」とよく言われている傾向はなく，またそう言われていた人たちの中に特別な傾向は

Akita University

見られなかった。さらに，きょうだい構成，出身校でも傾向は見られなかった。すなわち，以後の男女差は，環境要因よりも性別に関わって生じていることが推測された。「悩みがあると友達や家族に相談するほうだ」の質問には，女性がyesと回答する傾向が高く，逆に男性はnoと回答した。「感情をあまり表に出さないほうだ」という質問には，女性がnoと答える傾向が強かった。さらに嫌なことがあった日の処理の方法は，女性は友人や家族にその日のことをしゃべりたくなり，男性は一人で静かにゆっくりしていたい，傾向が見られた。ストレス発散方法では，女性は買い物・食べる・おしゃべり，が多く，男性はゲーム・寝る，が多かった。何か精神的に負荷がかかると，女性は友達と行動する傾向があり，逆に男性は一人になりたがる，と分析した。チームメンバーはこれらの結果を今後の人付き合いに役立てていきたいと考えている。このチームで得られた大学生に関する知見は，担当教員にとって，今後の学生指導のヒントになると考えられる。

研究テーマ「自殺にひそむジェンダー問題」（資料7）

ジェンダー問題というとすぐに女性差別を連想しがちである。しかし，ジェンダー問題というのは，対象を女性に限定しているわけではない。このチームは当初，男性の行動の妨げとなっているジェンダー問題が身の周りにないか，に興味をもち，研究を進めていた。たとえば若者に人気の高いプリクラには，女性専用コーナーなどがあったり，カラオケでは女性限定サービスなどがあったり，というような現象を調べていた。その後，メディアから発表された日本における自殺死亡率をみて，男性の自殺死亡率が高いことを知った。そして，もしかしたら自殺問題にもジェンダー問題がひそんでいるのではないかと考えた。チームは日本における自殺率の特徴を分析し，その背景に迫ろうと研究を進めた。

研究の結果，男性は女性に比べて家計を支える義務感が強いことが一因であることを見出した。つまり男性は，失業したり負債をかかえたりすると，女性以上に精神的ストレスがかかるのだろうと考察した。またストレスがかかった時に，男性には相談相手が少ないため処理できないことが多い。その結果として男性の自殺率が高くなっているのではないか，というのである。現代社会では，男性に精神的ストレスがより多くかかっていることが十分に考えられ，それを社会全体がもっともっと理解する必要があるのである。このことは，ジェンダー問題にうとい生物担当の教員の視野を大いに広げるものとなった。自殺問題と性とは一概に相関関係はない，とする研究もあるのだが，自殺予防対策には，本研究で得られた知見を十分に活かす努力が必要と思われる。

研究テーマ「ことばとジェンダー」（資料8）

一般に「美人」というと普通は女性を対象にしていると思ってしまう。このチームはこの疑問からスタートした。「美人」という言葉は暗黙の了解で美女を指している。一方「人」という言葉は女性にも男性にも適用される。美がついたとたんに女性だけに限定されてしまうのはなぜなのか。これをきっかけにチームは言葉におけるジェンダー問題の研究を行った。英語圏で，もともと男性を限定している職業名であるpolicemanは，police officerやpolice personなどにすでに変更されている。日本でも「兄弟」は「きょうだい」に「看護婦」は「看護師」に変更し，言葉上の差別をなくそうとしている。またチームは，中国出身の先生・留学生などにインタビューを行い，中国の事情も調べ，そもそも中国では女性が社会に出た頃から，単語の頭に「女」とつけることになったこと（女王，女帝，女丈夫など），もともと男性優位で言葉が成立してきたこと，を明らかにした。

普段何気なく使っている言葉にもジェンダーが潜んでいること，そのルーツと社会的変遷を明らかにしたこのチームは，さらに，ジェンダー問題を解決するには，単に言葉だけを変えるだけでは不十分で，法整備などによる実質的解決が必要であることにたどりついた。ただし言葉を変えることが人々の意識変革のきっかけとなるなら，言葉を変えることもジェンダー問題の解決のひとつの手掛かりになるだろうと考えている。そしてチームなりに，男女に求められる役割分担の差によって「美人」は女性に適用されているのだと「美人」の解釈に決着をつけている。そして，今後もし男性にも美しさを求めることになったら，男の人を

Akita University

「美人」と呼ぶようになるかもしれない，と想像している。

研究テーマ「学生のスーツにみられるジェンダー―入学式・教育実習・就職活動―」（資料９）

当初は，衣服に現れるジェンダー問題，特に正装について西洋と日本についての歴史的な変遷に興味をもって研究を行っていった。その結果，歴史的には女性の正装がワンピース型あるいはスカート型であることに気付いた。このことは実は，西洋と日本に共通している特徴であること（日本の女性の着物は考えると構造はスカート型である）にチームメンバーは気付いた。そして女性が社会進出をするようになってから女性のツーピースやスーツ（スカートスタイル）が登場し，1970年代になってやっとズボンタイプのスーツが登場し，公式の場で女性がズボンをはけるようになったことを理解した。そこでメンバーは，すでに衣服のジェンダー問題が本当に解決しているのかどうかに興味を持った。そこで，大学生が体験する公式の場，すなわち入学式・教育実習・就職活動のそれぞれの場面においてもすでにジェンダー問題が解決しているのかどうかを明らかにするために，学生にアンケート調査とインタビュー調査を実施した。またインタビュー調査では，録音した会話をすべて文字化して解析し，学生の中に潜むジェンダー感を浮き彫りにした。さらにスーツ店を取材し，売り手側の意識を調査した。

その結果，女子学生では，入学式でスカートの着用率が多いが，教育実習になるとズボン着用が多くなる。しかし就職活動ではスカート着用に回帰すること，販売店も就職活動時に女子学生にスカート着用を勧めること，などを明らかにした。またインタビュー調査から，女子学生は，企業に迎合したり，他人の視線を強く意識したり，と周囲に同調する傾向があることが判明した。さらに，周りを強く意識ながらも自己主張も重要視していることも判明した。このチームは，衣服について社会にはまだまだ固定的ジェンダー観が存在するとみている。

授業を振り返って

「文化にみられる性」の講座では，９つのテーマのもと実践を行ってきた。上記の報告のとおり，活動を通して学生は，多様な価値観，調べ学習力，プレゼンテーション力を十分に身に付けたと思われる。ここでは学生への授業中間時・授業後の各アンケート調査結果を示す余裕はないが，このことは各アンケート調査結果からも裏付けられている。

研究チームの人数をみてみると，平成19年は５名４つと４名１つ，平成20年は２名ずつを３つ，平成21年は４名で１つ，となっている。平成19年は受講生が多かったため，４名，５名構成になったが，１チームあたりのメンバー数は３か４名が妥当かもしれない。というのは２名だと一人あたりの負担量がとても多くなり（平成20年のケースでは，２名チームを３つ作成したのだが，この年の各メンバーの活動量は多く，かなりの負担だったとすこし反省している），逆に５名だと他のメンバーにかなり依存してしまう学生が出現する可能性があるからである（幸いにも平成19年の５名チーム４つにおいては，そのような学生は出現していなかったようである）。これまでの経験からしても１チームの人数は４名が適切であり，次年度以降は４名を基準にチーム編成を考えたい。

各チームは，それぞれ所属を異にしている場合が多く，それぞれこれまで持っていた価値観が大きく違っている場合が多く，それを持ち寄る形あるいはぶつけ合う形で研究が進んでいくので，学生同士で学びあう場面が多かったと思われる。複数のチームが形成された平成19年と平成20年では，テーマの異なるチーム間で知的好奇心の共有がみられ，チーム間でよい学習効果があったと思われる。また指導している３名の教員も分野が異なり，普段，一緒に議論することは稀であるが，この授業を通して，別の分野の価値観に触れ，大いに知的刺激をうけ，授業を実践していてとても有意義だった。また，知らない分野の研究手法などにも知る機会ができ，相互にとても勉強になった。このように教員の学問分野横断的授業は，教員相互を高めることにもつながるし，学生にも良い教育効果をもたらしたと思われる。

９つの研究チームともに，授業をとびだし，大学をとびだし，実践的に活動を行った。なかには学問的価値が高くすぐに学会発表できる研究，今後の研究へとつながる知的基礎研究，現在の大学生の意識をリアルに学生側・教員側ともに理解す

Akita University

ることにとても役立った研究，教員の知的好奇心を刺激した研究，これまでの価値観を揺さぶる研究，などがあり，とても有意義なものであった。本稿を執筆して，改めて９つの研究を振り返ってみると，どれもがオリジナリティーあふれるの研究成果であり，かつユニークであると実感している。そのため，この成果を少しでも広く知ってもらうのも本稿を執筆した理由の一つである。

謝辞

各研究チームは研究を実施するうえで，アンケート調査やインタビュー調査，現地調査で多くの方々にご協力をいただき，学内教員からもご教示をいただいた。個々のお名前はあげませんが，ここに深く御礼申し上げます。

付記

本稿における各研究テーマの研究成果は，総合ゼミ・講座Ｅで活動を繰り広げた受講生34名との共同研究成果としてここに報告する。なお以下の「参考文献」の項目では，各研究テーマにおける参考文献は列記しないことにする。各研究テーマにおける参考文献は，資料１～９の該当部分に記載してあるので，そちらをご覧いただきたい。

参考文献

石井照久（2009）；教養基礎教育科目「総合ゼミ」の実践報告．秋田大学教養基礎教育研究年報 11：1-8

Akita University

資料1

性格・行動に男女差はあるのだろうか？

講座E【国際言語文化課程】嶋崎由佳子　保坂　真理　三宅　朝子
【人間環境課程】佐藤　大地　増田　史治

目　的

日常生活での男女の行動や，恋愛面でおこる男女の考え方等は違うと言われており，それに興味を持ち，実際の生活の中で本当にそのような違いがあるのかを調べたいと思う。

調査方法

秋田大学生にアンケート調査を実施した。アンケートの各質問項目について，統計学的に検定処理（実際には二項検定法を用い有為差検定を行った）をして，男女特有の性格や行動があるかどうかを検証した。

・調査対象

秋田大学生91名　男子38名　女子53名

年齢　10代　男子26名　女子35名

　　20代　男子12名　女子18名

自分たちで考えた，一般的に男性寄り，女性寄りとされている性格・行動を以下の10個の質問項目にまとめ，それらを《はい・いいえ・どちらでもない》で答えてもらう。

○より男性に多いと思われる行動

①パズルや迷路が得意だ。

②遠くからサイレンが聞こえてきたとき，音がどこから聞こえてきたかすぐに分からない。

③子供の頃，国語よりも算数や数学のほうが得意だった。

④知らない土地でもすぐに北の方角をさせる。

○より女性に多いと思われる行動

⑤行きたい場所があり，地図を見ているとき，進行方向が上になるように回転させながら見ることがある。

⑥電話をしながら何か別のことができる。

⑦口論になるとつい感情的になる。

⑧人に話をしていて，「結論は何?」「結局何が言いたいの?」といわれることがある。

⑨考えや概念を説明するとき，明快で分かりやすい言葉を使って説明できる。

⑩人に自分のどこが好きかを尋ねたことがある。

結　果

・検定処理

「⑤行きたい場所があり，地図を見ているとき，進行方向が上になるように回転させながら見ることがある」の質問項目を例にすると

質問結果

	はい	いいえ	どちらでもない
男　子	12	22	4
女　子	37	14	2

ここで，「どちらでもない」の回答を除外し，男子の「はい=12名」と「いいえ=22名」および女子の「はい=37名」と「いいえ=14名」ついて，男女それぞれ「はい」と「いいえ」のどちらに答える傾向があるのかを，二項検定法を用いて有為差検定を行った。その結果，男子で「いいえ」と回答する傾向があることがわかった（信頼度90－95%）。また女子では「はい」と回答する傾向があることがわかった（信頼度99.5－99.8%）。よってこの質問項目は，「女性に特有な性格・行動」と判定された。

同様に，検定処理によって「女性に特有な性格・行動」と判定されたのは，「⑦口論になるとつい感情的になる」という質問項目であり，「男性に特有な性格・行動」と判定されたのは，「③子供の頃，国語よりも算数や数学のほうが得意だった」という質問項目であった。

上述のように，10の質問項目のうち3つの項目で明らかに男女差が認められた。そして，日常生活における男女の行動差を感じる傾向は男女ともに強く見られた。

Akita University

考　察

今回，性格や行動に男女差があるのかどうかに興味を持って調べたところ，原因の一つとして脳の構造が関係しているらしいということを知った。

自分たちで男女に違いが出そうな質問項目でアンケートを行い，統計処理を行った結果，男女差が明らかになった質問項目が見つかった。そして私たちは「性格や行動には男女差があるだろう」と考えた。

男女差の原因は，社会説や環境説，脳の構造など，様々なものがあると考えられている。しかし，いまだどれも明確な根拠はない。

今後，様々な研究が進み，性差と性格・行動との関係が明らかになることを期待している。

主な参考文献

日本経済新聞社　2007『別冊日経サイエンス・ここまでわかった男脳・女脳』

アラン・ピーズ，バーバラ・ピーズ　2000『話を聞かない男，地図を読めない女』

サイモン・バロン＝コーエン　2005『共感する女脳・システム化する男脳』

石居　進　1975『生物統計学入門』

謝　辞

今回の研究についてご助言をいただいた星宏人先生，また，アンケート調査にご協力いただいた秋田大学生の皆様に，この場を借りて感謝致します。

Akita University

資料2

大学周辺の土壌生物の性

講座E【地域科学課程】三浦健太郎　佐野　彰紀　鈴木　雄太
【国際言語文化課程】小綿　華苗
【人間環境課程】高橋麻深子

目　的

生物は自分の置かれている環境に合わせる形で「性」という機能を変化させている。人間以外の生物の「性」はどのようになっているのか，様々な「性」の形態を調べることによって理解することを目指し，さらにフィールドワークを通じて私たちの生活空間の中にもそのような生物がいるのかどうかを調査する。

方　法

文献調査（インターネット・書物），大学周辺の土壌生物の調査（フィールドワーク）

結　果

(1) 文献調査

生物の性は大まかに分けると「雌雄同体」「雌雄異体」「雌雄が無い」ものに分けられる。

雌雄同体は文字通り一個の個体の中に雄と雌の両方の性を介在させている性体系である。雌雄同体はさらに，雄が雌へと，雌が雄へと性転換を行う「機能的雌雄同体」と，一匹にオス・メスの生殖器を両方持っている「同時的雌雄同体」と呼ばれる二つのタイプに分けられる。同時的雌雄同体の中には交尾を必要とするものと，一匹で放卵と放精により受精し生殖できるものがいる。おしべとめしべを有する植物は基本的に雌雄同株（体）である。

私たち人間のような生殖器が両性に分かれているのが雌雄異体である。雌雄異体の生物の中には，雄どうしが戦う「雄間競争」や雌どうしが戦う「雌間競争」を行い，自分の相手となる個体を奪うために大きな労力を割くものも存在する。植物にもオスの木とメスの木がある種類もあり，それらは雌雄異株（体）である。

雌雄が無いのは原核生物など，体細胞分裂で増える生物である。しかしその中にも，大腸菌のように接合と呼ばれる生殖行動に似た行為をする種類もいる。接合は遺伝子の交換を目的としており，その点では性に近いものを持っている，という説もある。

(2) フィールドワーク

・動機

秋田大学と手形山にはどのような生物がいて，どの性体系の生物がいるのか。また，二か所の環境の違いで生物に違いが見られるのか。

・予想

環境に違いがあるので雌雄同体，異体の割合に差があるのではないか。

7月5日，12日に秋田大学構内3か所と手形山周辺の土壌を採取し大学に持ち帰った。大学ではまず土壌中の生物を肉眼で探した。その後ツルグレン装置にかけて顕微鏡サイズのものを探した。

・結果

◎秋田大学校内から採取できた土壌生物

アリ，甲虫の幼虫，ハエの幼虫，ダンゴ虫，ダニ，ワラジ虫，カタツムリ，ミミズ，トビムシ，アザミウマ，ヤスデ，クモ，ゾウムシ

◎手形山から採取できた土壌生物

ムカデ，ダンゴ虫，ワラジ虫，ミミズ，ガの幼虫，アリ，甲虫の幼虫，ダニ，ヤスデ

※この二地点の間で採集できた生物にあまり違いは見られなかった。よって性体系の違いも認められなかった。

この生物たちを調査した結果，興味深い生殖方法，性体系を持っている生物がいることが判明した。

①ミミズ：ミミズに雌雄はなく同時的雌雄同体である。よって異性を探す必要がなく，ミミズがミミズに出会えば生殖は可能になる。

②トビムシ：直接個体同士が交尾をすることは

Akita University

なく，オスは精包を土の表面に置き，メスがそれを拾い上げて受精するという方法をとっている。

③アザミウマ：交尾を行うとメスになり，行わないで単為発生するとオスになるという非常に不思議な性体系をもつ。

考　察

今回の研究ではまず「生物の性体系」についての知識を得ることから始めた。その過程で，私たちが聞いたことがある生物の中にもヒトとは違う形で子孫を残している種がいた。

私たちの生活空間の中にもヒトとは違った性体系の生物がいるのか，という疑問，また微妙な環境の変化によって生物の性体系は変化しうるのかという疑問を基にフィールドワークを行った。その結果としてヒトとは違った形での生殖活動をする生物が確かに身の周りにいるという証拠を得ることができた。また環境の違いによる性体系の変化という点は，今回は違いを認めることはできなかった。

ヒトを代表とする雌雄異体という性体系がすべての生き物に一般的なものではないということ，またそのように別の性体系をもった生物が確かに身近にいることを知ったことが今回の研究の成果である。

参考文献

・「オスの戦略　メスの戦略」長谷川眞理子著　NHK出版

・「週刊朝日百科　動物達の地球」第４号，第87号，第92号　朝日新聞社

・「生物観察実験ハンドブック」今堀宏三ら編　朝倉書店

・「小学館の図鑑NEO③　昆虫」小学館

Akita University

資料３

秋大生の考える理想の女性像・男性像

大山　愛・佐藤かすみ・田畑　志帆・古川ちひろ・矢嶋　沙織

１．研究目的

私たちは「平安・江戸・現代の女性の地位の変化」というテーマに取り組んでいたが、中間発表会で、テーマの問題点と男性についての調査もすべきとの指摘を受けた。そこで、より身近な現代の男女の理想像に焦点を当てることにした。

２．調査方法

調査対象　秋田大学生１年から４年生・125名（女性 88名、男性 37名）にアンケート調査を実施。

調査期間　2007年７月４日～７月12日

アンケートの内容については、以下の通り

① 親や祖父母など、家族は夫婦についてどのような考えを持っているか。また、回答者自身はどのような夫婦観を持っているか。

② 回答者が中学生になるまでの両親の労働日数とその労働時間。

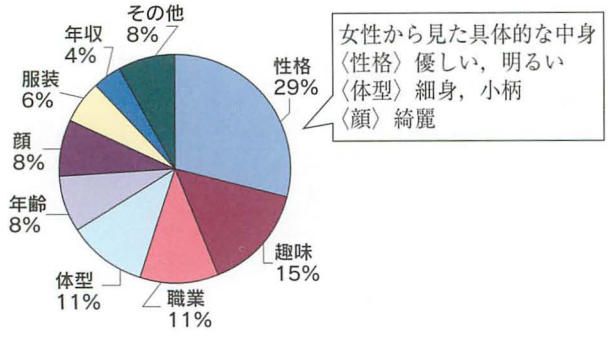
③ 理想の男性像・女性像について性格、体型、年齢、顔、服装、趣味、職業、年収、その他の中から当てはまる項目を３つ選択し、その具体例を記述する。

④ 理想の男性像・女性像を形成するのに影響したものについて、親、友人、テレビ、雑誌、マンガ、その他の中から当てはまる項目を選択し、その具体例を記述する。

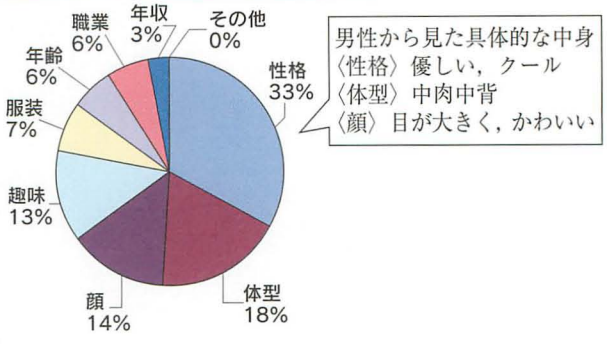
３．調査結果

(1) 理想の女性像

女性から見た「理想の女性像」

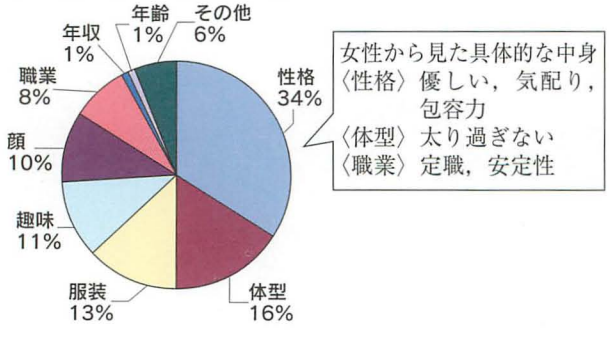


男性から見た「理想の女性像」

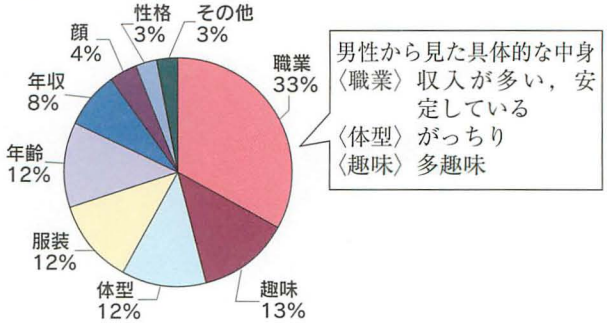


(2) 理想の男性像

女性から見た「理想の男性像」



男性から見た「理想の男性像」



Akita University

(3) 夫婦の性別役割分業観

自分から見た親の役割分業観について

	女　性	男　性
平等派	40%	67%
分業派	49%	33%
ギャップ派	11%	0%

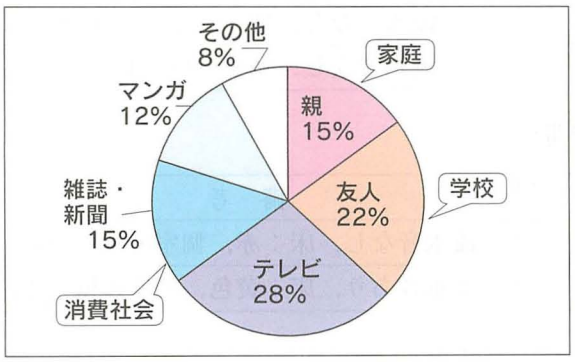
自分の役割分業観について

	女　性	男　性
平等派	100%	89%
分業派	0%	8%
ギャップ派	0%	3%

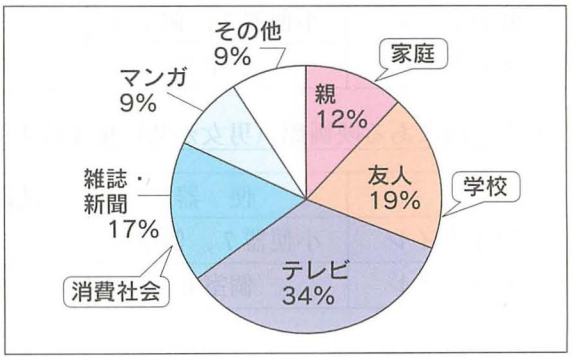
女性…親の役割分業は平等ではないと批判的な見方をしている。
　　また，自分の場合は平等がよいという意見がほとんどだった。
男性…親の役割分業は比較的平等，という見方をしている。
　　自分の場合は平等派がほとんどだが，分業派，ギャップ派もいる。
※ギャップ派…男女平等だと考えているが，実際はほとんどの家事を女性が行っている人たちのこと

(4) 理想像形成に影響したもの

女　性



男　性



4．考察

○「理想の女性像」では，男女共に「優しい」性格を多く挙げており，顔については，女性は「綺麗」男性は「かわいい」を理想としていることから，女性自身は自立した存在に憧れて，男性は女性を守る対象と見ていると考えられる。

○「理想の男性像」では，女性は，「優しさ，包容力」，男性は「収入が多い」を挙げていて，体型について見ると，女性は「スマート」，男性は「がっちり」，体型を理想としている。このことから，男性は強く，たくましくなければならないという意識があるのではないかと考える。また，女性は経済力を男性に求めていないが，男性は経済力を必要と感じていることからもそういった意識がうかがえる。

○夫婦の役割分業観については，女性は親を批判的に見ていることから，女性は家事をしなければならないという意識があり，そのような現実を変革したいと考え，平等を望んでいるのではないかと考える。また，男性はそういった意識が薄いので，平等派は多いが，分業派の男性も約１０％いる。以上の結果から，これからの家庭では，性別役割分業をどうしていくかが課題となるのではないだろうか。

○理想像を形成する上で，家庭・学校・消費社会のトライアングルが影響するが，家庭では親の性別役割分業観の影響が大きく，学校では，友達の影響が大きい。しかし，最も影響を与えているのは消費社会のテレビ・雑誌・マンガなどのメディアである。学校では，ジェンダーの視点でメディアを読み解くメディア・リテラシーの教育が求められていると思われる。

参考文献

・『ジェンダーと教育』ハンネローレ・ファウルシュティッヒ＝ヴィーラント　青木書店　2004
・『思春期の危機を生きる子どもたち』中西新太郎　はるか書房　2001
・『季刊セクシュアリティ』エイデル研究所　2002

Akita University

資料4

生活空間から見るジェンダー

教育文化学部　国際言語文化課程
本山未菜子・村井沙耶佳・菅野　里美・佐藤　千夏・大津　彩

問題の所在

私たちが利用する生活空間をジェンダーの視点から見直してみたいと思った。

1．秋田市内の生活空間

FORUS（女性が主に集まる生活空間）

	便　器	洗面台	備　考
男子トイレ	小便器7，個室3	3	流水音なし，個室の壁：ブルー
女子トイレ	個室5	6	流水音なし，個室の壁：ピンク

アルヴェ内にある映画館（男女が共に集まる生活空間）

	便　器	洗面台	備　考
男子トイレ	小便器7，個室3	5	流水音なし，床：赤，個室の壁：黄色
女子トイレ	個室8	6	流水音あり，床：黄色，個室の壁：赤

映画館自体のデザインは水野晴郎（みずのはるお）さんが手がけている。アルヴェ映画館は事情により経営者が変わっているため，設計段階のエピソードは分からない。

障害者用トイレには，乳幼児を座らせておくイスとベビーシートがあった。誰でも使用できるようになっている。

↑女子トイレ

↑障害者用トイレとベビーシート

↑障害者用トイレと乳幼児用イス

2．秋田大学内の生活空間

教育文化学部と工学資源学部のトイレの比較

工学資源学部

男子トイレの数：女子トイレの数

便器の数（個室を含む）：洗面所の数

工1（古い棟のみ）→ *5：4*　男5：1　女1：1
工1（新しい棟）→→ *1：1*　男6：1　女1：1
工2（主に地資）→→ *7：2*　男4：1　女1：1
工2（主に機械）→→ *4：1*　男6：1　女1：1
工3 →→→→→→→ *3：1*　男6：1　女5：2
工4 →→→→→→→ *3：1*　男5：1　女2：1
工5 →→→→→→→ *3：2*　男4：1　女1：1
工6（新しい棟）→→ *1：1*　男7：2　女2：3

教育文化学部

教1 →→→→→→→ *7：6*　男5：2　女7：6
教2 →→→→→→→ *1：1*　男3：1　女2：1
教3 →→→→→→→ *6：5*　男10：3　女3：2
教4 →→→→→→→ *工事中*
教5 →→→→→→→ *1：1*　男6：1　女3：2
般1 →→→→→→→ *1：1*　男3：1　女5：2
般2 →→→→→→→ *1：1*　男9：2　女1：1

Akita University

3．空間構成の違いに関する調査

企業インタビューと調査結果

①「いつ頃男女で色の区別をし始めたのか」

主に昭和40年代ではないか。その頃，衣料，家電，自動車などの消費ブームのなかで培われた人々の生活に対する感覚は，より豊かに鋭敏になり，商品を厳しい目で選択するようになった。あらゆる生活空間に，カラーなどの内部のインテリアに多彩な要求が出されるようになり，よりファッショナブルに，よりカラフルに，さまざまなバリエーションが要請されてきた。また「ピーコック革命」をいう言葉が流行し，１パターンだったサラリーマンルックにカラーシャツを着せようとする動きが見え，カラー時代の到来かと騒がれたりもした。昭和45年６月に７色の衛生陶器「TOTOニューカラー」を発売する。そういった社会的背景もあり，７色もあるのだからせっかくなので…と男女で色を区別していったのではないか。男は青，女は赤…というのは男女がそれぞれ好む色であるからだそうだ。

②「音姫はいつ頃人気が高まっていったのか」

以前から節水問題は深刻だったため発売当初から売れていて，商品の認知度が上がるにつれて販売数も上がっている。

また用を足す音を恥ずるのは江戸時代から始まっていた。当時外出用に携帯型の音姫「厠土瓶（かわやどびん）」まであったという。現代なら，携帯電話にでもつけてほしい機能である。また「厠団子（かわやだんご）」と呼ばれる土でできた団子状の玉が準備されていて，それを落とし続けることで，大きい方の時もどの音が本物か分からないように紛れさせたということだ。

③「現在も男女で区別のあるトイレが主流か。」

現在は２つの傾向がある。１つは色の区別をつけるトイレ，２つ目は区別をつけないもの。その理由はそれこそジェンダー問題を考えて，ということもあるが，排泄物の色がよく分かる「アイボリー」が主流になっているため健康管理という面において。

「生活空間におけるジェンダーについて」のアンケート結果（調査対象秋田大学生100人）

Q．異性が多く集まるところに自分が入るとき，違和感や抵抗を感じますか？

	全体	男性	女性
感じる	34	15	19
少し感じる	49	27	22
あまり感じない	11	4	7
全く感じない	5	4	1
無回答	1	1	0

83%の学生が違和感や抵抗を感じている

Q.「男性」,「女性」,「男性と女性」を象徴する色があるとしたら何色だと思いますか？

「男性」を象徴する色⇒青（65），黒（17）

「女性」を象徴する色⇒赤（46），ピンク（38）

「男性と女性」を象徴する色⇒黄色（15），白（15），緑（８）

※（　）内は回答人数で，回答してもらった色の上位のものを挙げている。

Q．普段の生活の中で，男性と女性どちらが優遇されている（得をしている）と感じますか？

	全体	男性	女性
男性	4	1	3
女性	50	23	27
どちらでもない	46	27	19

〈理由〉
男性⇒就職など仕事面で有利
女性⇒レディース割引など日常面で有利

4．まとめ

■男女平等社会を目指す現代においても，いまだジェンダーは根強く私たちの生活の中に残っている。

■性が存在する社会で大切なのは，全てを画一的にすることではなく，人間が心地よく過ごせるために両性にとって公平・平等にすることであると思う。

■私たちの利用する生活空間は，ただ機能的なものとしてだけではなく，利用者が気軽に，気持ちよく過ごせる空間になるように精神面にも気を遣って造られている。

Akita University

資料5

キリスト教にみられるジェンダー

講座E「文化にみられる性」
片山　美穂・伊藤　　梢
佐々木　愛・千葉　　優

目　的

一神教の神には性がないはずなのに，聖書では神を男性であるかのように表記していた。
例)「God the Father（父なる神)」「Son of God (神の息子)」

私たちは，これは女性差別ではないかと思い，キリスト教に見られるジェンダー問題を調査することに決めた。

方　法

主に文献調査を行い，メンバー内で議論した。また，実際に教会を訪問しキリスト教の信者の方から直接お話しを聞いた。先生たちからの助言をもとに考察を進めた。

結　果

◎文献調査

●聖書の記述にみられた女性差別

・パウロの手紙には男女平等を示している一方で，女性差別を感じさせる記述があった。

＜男女平等の記述＞

「キリスト教には男も女もありません。あなた方は皆，キリスト・イエスにおいて一つだからです。」

＜女性差別を感じた記述＞

「女が男から出てきたのだし，女が男のために造られたのである。」

「婦人たちは，教会では黙っていなさい。婦人たちには語ることは許されていない。」

↓

女性は男性よりも劣っている，女性は男性に従うべきだなどの意味にとれる

●男性に従うことに疑問を持った女性

・17世紀，アン・ハッチンソンという女性は，先のパウロの平等を示す教えに基づく「神の祝福は信仰によって人々に平等に与えられるものである」という牧師ジョン・コットンの教えを広めるために活動した。しかし，女であることを理由に異端審問裁判にかけられて弾圧されてしまった。

以上の二点から，私たちはキリスト教に女性差別があったのだと考えた。

◎秋田教会を訪問

信者ではない私たちがジェンダー問題について教会に尋ねるのは，聞きづらく向こうも答えにくいため実はとても難しい事であったが，秋田教会は立花先生の知り合いの方の教会だったので訪問が実現できた。

●カトリックの女性聖職者禁止について

＊カトリックで女性が聖職者になれないのは差別ではないかと思ったので，質問した。

カトリックは，一つの巨大な組織であるためその全体で女性の聖職者を認めるのは難しい。さらに，聖職者を叙任する権限を持つ聖職者たちが全員男性であることからも，女性聖職者を任命するとは考えにくい。

●パウロの女性差別を感じさせる記述について

＊男女平等的な発言もしているので矛盾ではないかと思ったので，質問した。

当時コリント教会で被り物を被らずに発言をしたり，集会の秩序を乱してまで発言をし続けたりする女性がいた。パウロはそのような女性の態度を問題にして，あえて女性に黙っているようにと言った。よって，パウロは女性の差別を意図していたわけではない。

Akita University

考　察

私たちは当初，キリスト教にみられる女性差別の原因はキリスト教の思想や制度にあるのだと考えていた。しかし実際は，キリスト教の中ではなく，当時の人々のほうに無意識に植え付けえられている女性差別・男性優位な社会環境などの要因によって女性差別は生まれてしまったと考えられる。

これまで調べた結果，やはりキリスト教には女性差別があった。しかし，この女性差別はキリスト教だけに見られるものではなく，他の色々なところでみられるジェンダー問題の一つであることがわかった。女性牧師の誕生は，当たり前とされていたことに疑問を持ち変える努力をしたことが解決につながったのだと思う。そして，この当たり前のことに疑問を持ち改善に努めるということは，ほかのジェンダー問題にとっても大事である。それに気づくことができただけでもジェンダー問題への理解を深めることに役立ったと思う。

参考文献・URL

・新共同訳聖書　日本聖書協会
・「神々のフェミニズム」生駒孝彰 著　荒地出版社
・「性の意味　キリスト教の視点から」宮谷宣史編　新教出版社
・「世界『宗教』総覧」井門富二夫ほか　新人物往来社
・「史料で読むアメリカ文化史①」遠藤泰生　編　東京大学出版会
・http://www.jesus-web.org/archives/box021218.html
・http://www.jesus-web.org/archives/win0816.html
・http://ha3.seikyou.ne.jp/home/tenryo/paul_2-6.htm

謝　辞

ご協力頂いた，日本キリスト教会　秋田教会の白井さんご夫婦にこの場を借りてお礼申し上げます。

Akita University

資料6

男女に考え方・行動の違いはあるのか？

講座E【国際言語文化課程】大久　真澄
【人間環境課程】山下　直輝

目　的

- アンケートを通して男女での考え方・行動に違いが表れるのかを明らかにする。
- 育ち方・きょうだい構成で考え方・行動に違いがあるのか明らかにする。
- 男女で考え方・行動に違いがあれば，予備知識としてこれからの人付き合いに役立てたい。

調査方法

秋田大学生にアンケート調査を実施し，アンケート結果をエクセルに打ち込みデータ化した。そしてアンケートの各質問項目おいて，可能な限り統計学的に検定処理をして，男女特有の考え方・行動があるのかどうかを検証した。

昨年の総合ゼミでのアンケート調査との違い

昨年の総合ゼミでも男女差を検証するアンケートを実施しているが，昨年はアンケート項目にきょうだい構成や出身校，また育ち方についてのアンケート項目がなかったため，今回はそれらをアンケート項目に追加した。またアンケートの各質問項目は，昨年のアンケート項目を参考にしながら作成した。

結　果

秋田大学の１－４年生（教育文化学部と工学資源学部）および大学院生（教育学研究科）の男性73名と女性75名の合計148名にアンケートに協力してもらった。

アンケート項目にある[小さい頃，親や周りの人に「男の子だから～」「女の子だから～」とよく言われていましたか？]という質問では男女どちらもNoと答える傾向（男性信頼度99.9%，女性信頼度90%－95%）があった。また，Yesと答えた人の中に特別な傾向はみられなかった。また，きょうだい構成でも出身校でも特に傾向はみられなかった。

次に，Yes，Noで答えてもらうアンケートの質問項目での「悩みがあると友達や家族に相談するほうだ」という質問では

	Yes	No
男　性	19名	54名
女　性	49名	26名

ここで，この質問に対して男性はNo，女性はYesと答える傾向があるのかを二項検定法を用いて検証した。その結果，男性はNoと答える傾向があり（信頼度99.9%），女性ではYesと答える傾向がある（信頼度98%－99%）ということがわかった。したがって，この質問項目は「女性に特有な行動だ！」と判定された。

また，「感情をあまり表に出さないほうだ」という質問について，同じように二項検定法を用いて検証すると，男性ではYes，Noどちらも傾向は見られなかったが，女性ではNoと答える傾向があった（信頼度99.8%－99.9%）。したがって「女性は感情を表に出すことが多い」ということがわかった。

さらに，「人間関係で嫌なことがあった日はどうしたくなりますか？」の質問項目への回答では

☆　友人や家族にそのことをしゃべりたくなる。
☆　テレビを観たりして，ゆっくりしたい。あまり人と話したくなくなる。

この２つの回答が圧倒的に多かった。

最後に，男女ともに同じ回答となる傾向が見られたのは以下の5つの質問項目だった。

- 男女ともにYesと回答する傾向があった
  「人の名前や顔を覚えるのがあまり得意ではない」
- 男女ともにNo　と回答する傾向があった
  「アドバイスされるのがあまり好きではない」
  「トイレに行く時，友達を誘っていくことが多い」

Akita University

「キャンパス内で同性と手をつないで歩くことがある」

「テスト勉強は友達と一緒にすることが多い」

考　察

アンケート調査を通じて男女で統計処理を行った結果，考え方・行動の違いがあらわれた質問項目が2つ見つかった。どちらとも女性に特有と判定された考え方・行動だった。一方男性に特有と思われる考え方・行動は，統計処理をできない質問項目について見つかった。具体的には「人間関係で嫌なことがあった日はどうしたくなりますか？」という質問項目に対して「テレビを観たりしてゆっくりしたい。あまり人と話したくなくなる」という行動だった。同様に女性では同じ質問で「友人や家族にその日のことをしゃべりたくなる」という行動だった。また，「ストレス解消法を教えてください」という質問項目では，男性の回答として「ゲーム，寝る」など一人で行動するような回答が多くあり，女性の回答として「買い物，食べる，おしゃべり」など友達と行動するような回答が多くあった。また，男女の共通の回答として「カラオケ，音楽を聴く」などがあった。以上から男女で考え方・行動に違いがあると考えられた。また今回のアンケート調査を通じて育ち方・きょうだい構成では，考え方・行動に違いは認められなかった。私達は男女で違いがあらわれた2つの質問項目の結果について，考え方・行動は，育ち方などというよりむしろ性別に左右されているのではないかと考えた。男女で差があらわれなかった質問項目については，今回調査項目になかった環境要因が影響しているのではないかと考えられる。

今回の研究からこの2つの質問項目については男女での考え方・行動に違いが認められたので，このことをこれからの人付き合いに役立ていきたいと考えている。

謝　辞

今回の研究においてアンケート調査にご協力頂いた秋田大学生の皆様に，この場を借りてお礼申し上げます。

主な参考文献

アラン・ピーズ，バーバラ・ピーズ　2000『話を聞かない男，地図を読めない女』主婦の友社

石居　進　1975『生物統計学入門』培風館

山村嘉己，大越愛子，源淳子　1992『文化のなかの女と男』嵯峨野書院

Akita University

資料7

自殺にひそむジェンダー問題

講座E：鈴木紳一郎・米澤百合乃

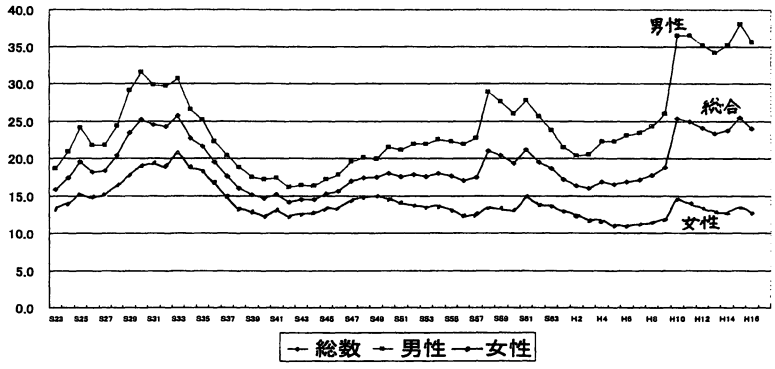
1．はじめに

私たちははじめ、男性の行動の妨げとなっているジェンダー問題が身の周りにないだろうか、というテーマで調査していました。しかし最近メディアから昨年の自殺死亡率が発表され、男性の自殺率が女性の倍以上だと知り、男女間の大幅な自殺率の差の一因として、ジェンダーの問題がひそんでいるのではないかと考え、新たなテーマで調査をスタートしました。

2．日本の自殺率の特徴

（1）　日本の自殺率の推移グラフ→

- 女性の自殺死亡率は概ね低下傾向
- 男性の場合戦後に二回のピーク
  現在は戦後最も高い水準
- 平成10年に全体に占める男性の自殺率が7割を超えた
- 現在の自殺率男女比
  男性：女性＝7：3



※ 人口10万人当たりの自殺者の数　　厚生労働省資料（人口動態調査より）

3．男性の高い自殺率の背景には??

〈国立社会保障・人口問題研究所『自殺による社会・経済へのマクロ的影響調査（H13～15）調査研究報告書』より〉

◆ **Danuta Wasserman 教授の見解**

"自殺率は加齢に伴い上昇する傾向がある。その背景には、中高年男性の場合には、男女間の労働力率の差が日本ほど顕著ではない欧米においても、失業すると、所得が減ることによる経済的不安に加えて性的役割分業[注]による責任感と職場などとの社会的ネットワークの喪失なども加わり、ストレスがより多く生じ、自殺のリスクが高まる。"

※性的役割分業…夫婦間で、男性が経済的負担を担い、妻が家事育児の負担を担う、労働を性別によって分担する形態。

※Wasserman…スウェーデン国立及びWHO自殺研究・精神疾患予防センターの所長

4．自殺に至る危機要因の連鎖

厚生労働省『自殺白書』2008より

- 家庭問題（家族の不和、ＤＶ、家族の死）　・健康問題（精神、身体の疾患、アルコール）
- 経済問題（失業、倒産、事業不振、負債、借金の取り立て）
- 職場問題（職場の人間関係、職場環境の変化、過労、仕事の失敗）
- 男女問題（失恋、不倫の悩み）
- 学校問題（進路の悩み、学業不振、いじめ、引きこもり）
- その他（後追い、心中、冤罪、更年期障害、若年性認知症）　・不明

⇩ 主に男性の自殺に関わりがあるのは…

失業、負債、職場の人間関係、生活苦　などの社会経済的要因である。

Akita University

5．危機要因の連鎖に陥りやすいのはなぜ??

Wassermanの指摘…

1. **性的役割分業による責任感**　　2. **社会的ネットワークの喪失**　　の二つがキーポイント！！

(1) 悩み・ストレスを持った時、誰に相談するか？

表―相談できる人の有無、相談相手の割合

（単位：%）

	相談できる人がいる	相談相手（複数回答）							相談できる人はいない
		上司・同僚	家族・友人	産業医	産業医以外の医師	保健師又は看護師	衛生管理者又は衛生推進者等	カウンセラー	
女性	93.4	62.9	89.7	2.4	2.0	2.8	0.5	1.0	6.6
男性	86.3	65.1	77.3	6.4	3.8	3.2	1.4	2.1	13.7

出所　厚生労働省『平成14年　労働者健康状況調査の概況』より作成

女性…家族・友人、相談相手がいない 6.6%　　男性…上司・同僚、相談相手がいない 13.7%

→個人差を考慮されないまま、身体的精神的なたくましさを求められるというジェンダー観がここにも潜んでいる。

(2) 性的役割分業による責任感と社会的ネットワークの喪失がもたらす他の事例

ホームレスの男女比率　（2000人の面接調査より）

性別：**男性 93.1%　女性 4.7%**

年齢：50歳以上が80%以上

野宿になった理由

「仕事が減った」36%　「失業」33%

失業などの経済困難に陥った時、頼る人がいない、他人に頼るのは嫌だ、という理由で野宿を選ぶ。

- ネットワークが職場などに限定
- ジェンダーの固定観念に縛られている

6．自殺予防対策の実例

(1) 自殺予防モデル事業

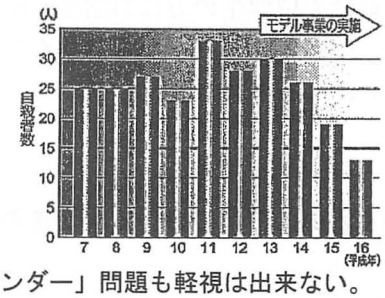
→秋田県で行っている自殺予防事業。県が自治体に補助金を出し、3年間かけて実施する。

実施例①：合川町「ふれあい相談員」　　実施例②：藤里町「心といのちを考える会」

＜モデル事業の効果＞

- 自殺者数：平均２８人（1998～2000年）
  →１５人（2004年）
- モデル町の周辺町村での影響

自殺予防モデル事業実施6町の自殺者数



(2) 都市部のハローワーク

→精神的問題を抱えた人が多い⇒心のケアを行う窓口の設置

7．まとめ

- 女性より男性の自殺率が高いことの一因として、「性＝ジェンダー」問題も軽視は出来ない。ジェンダー問題において主に女性がクローズアップされる今、男性が抱える不安・負担についての理解も必要になってくるのではないか？
- 秋田県のモデル事業や都市部のハローワークの例のように、悩みを打ち明けやすい上手な聴き方のスキルを身内や友人が専門家から教わるなど、実際に自殺予防に効果があると分かっている方法を、男性に対して積極的に行っていくことが、男性の自殺率、ひいては日本全体の自殺率の低下につながるのではないだろうか？

参考文献・本橋豊・渡邊直樹『自殺は予防できる―ヘルスプロモーションとしての行動計画と心の健康づくり活動―』すぴか書房
・Danute Wasserman編著，坪井宏仁等監修『自殺予防学』　2006.9学会出版センター
・大沢真理『男女共同参画社会をつくる』　2002.9　日本放送出版協会　　他多数

Akita University

資料8

ことばとジェンダー

佐々木佑太 1507425
安中　　妙 1507303

目　的

一般的に美人といえば女性を指す言葉である。しかし，「美人」という単語には「女」という言葉は含まれておらず，「人」は男性女性どちらをも指す言葉である。これはことばによる男女差別ではないのか？その疑問をきっかけとして，私たちはことばのジェンダー問題についての研究を始めた。

方　法

・ことばの面から男女差別に関して他国と比べて日本の男女差別について考察する。
・漢字のルーツについて調べるため，中国の歴史などの面から男女差別を見直し，そこから，ことばのジェンダー問題について考察する。
・中国人の教授や留学生の方にお話をお聞きしたり，漢字について書かれている辞典などで漢字の成り立ちについて調べる。

結　果

1）現在の日本のことばにおける男女差別について

現在の英語圏では

policeman → police officer, police person

のような方法がとられている。これを見習ってか日本でも

兄弟→きょうだい（平仮名にすることで姉妹の意味も含める）

看護婦・看護士→看護師（両性をあらわすものにする）

これらのように男女どちらかのみを指す言葉をなくし，差別解消を図っている

2－1）中国のことばにおける男女差別について

—中華人民共和国成立以前—

中国では長い間女性は社会的に低い立場にあり，清（1616～1912）に至っても纏足などの風習もあって社会に出ることが少なかった。その当時までに成立した言葉には男性を指す意味のものが多く，後に女性が社会に出た時それを補うため，単語の頭に「女」とつけることが多くなった。

例）女王・女帝・女丈夫など

—現在—

女性の社会的地位が認められ，男女差別はなくなっていると主張されている。しかし昔に男性優位のためできた言葉を新しく作り直したりなどはしていない。これは言葉を変更しても差別は改変されず，実質的な問題解決にはならないという考え方から来ているものと思われる。

2－2）イスラエルのことばにおける男女差別

ヘブライ語聖書は神の言葉であり1字たりとも変更が不可能であるとみなされている。そのため，日本のように簡単に言葉を変えることは不可能である。また，ことばを変更しても男女差別は解決されず，差別は実質的に解決すべきであるという議論がある。

3）美人が女性を指す言葉になった理由について

昔は特に，女性には美しさが求められてきた。一方男性は，丈夫（じょうふ）という言葉が一人前の男子や立派な男という意味を持つように，強さを求められた。現在は昔ほど顕著にその差は現れないが，やはり男女の間ではその役割に差があると思われる。これは，差別というよりもむしろ特徴のようなものだと考えられる。よって美人という言葉の意味は女性が主になっていると私たちは結論を出した。もし今後，男性にも美しさを求められるようになったら，男の人を美人と呼ぶようになるかも知れない。

Akita University

考察・結論

ジェンダー問題を解決するには英語圏のように言葉を変えても，それをただ何となく使うだけでは，差別は無くならないと思われる。また，中国やイスラエルのように，差別を根本からなくしていくことは現在の日本では難しい。それならば言葉を変えるよりも，法律などを改定していった方が，男女平等の実現につながるだろう。 しかし，単語を変えたり，新しく作ったりという行動そのもの，新しくできた単語が私たちの意識に働きかけて，そこから社会が動き出すならことばはジェンダー問題の解決のひとつの手がかりとなるだろう。

謝　辞

杜威先生（秋田大学教育文化学部学校教育課程），石川三佐男先生（秋田大学教育文化学部国際言語文化課程），崔慶梅さん（国語教育専修1年次）にご協力頂きました。大変ありがとうございました。

主な参考文献

『ことばとフェミニズム』，中村桃子，（1995年）

・*The New Testamant and Psamls:An Inclusive Version*, Oxford University Press,1995

Akita University

資料９

学生のスーツにみられるジェンダー
－入学式・教育実習・就職活動－

講座Ｅ：谷村　生・張　成日・白木澤二枝・三浦　歌織

１．目的

私たちは，衣服に現れるジェンダー問題，特に正装について西洋と日本について歴史的なことを調べた。その結果，西洋でも日本でも伝統的に，男性はズボンスタイル（それぞれの足を布でくるむスタイル；足が自由に動かせる），女性はスカートスタイル（両足を一緒に布でくるむスタイル；足を動かすとき裾の乱れが気になる）であることがわかり，衣服の形態に現れるジェンダー問題が過去に存在していたことを理解した。しかし現在は男女平等の社会になり，すでに衣服によるジェンダー問題は消滅しているのかもしれない。そこで大学生の身近な正装の場（入学式・教育実習・就職活動）において，歴史的に続いてきた女性＝スカートの固定意識が，現在どうなっているのかを調べることを目的とした。またその原因や理由についても考察を行った。

２．導入

過去　歴史的に続いている考え・見方から女性はワンピースとスカート

⇩

戦後：女性もツーピースやスーツを着用（女性の社会進出に伴い）

1970年代頃：ズボンタイプのスーツが登場

⇩

現在　女性も公式の場でズボンをはけるようになった！

女性に関する衣服のジェンダー問題は解決済み？

３．方法

・学生へのスーツに関するアンケート調査（量的調査）：教育実習生，就職活動者
・学生へのスーツに関するインタビュー調査（質的調査）：教育実習生，就職活動者
・スーツ店への聞き取り調査・広告収集

４．結果

１）アンケート調査からわかったこと（図１）

・スーツに対するイメージはスカートが75%と主流
・普段着はズボンが圧倒的に多い！（67%）
・入学式という公式の場ではスカートが多い！（60%）
・教育実習ではズボンが多い！（46%）←機能・活動重視
・就職活動ではスカートに回帰！（64%）←外見・印象重視

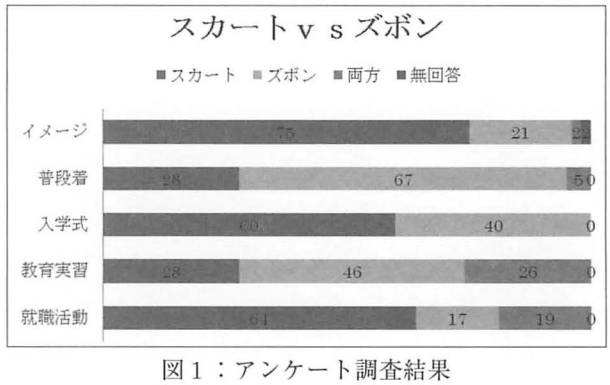


図１：アンケート調査結果

２）スーツ店での調査からわかったこと

・店内のパンフレットをみると，女性のスーツ＝スカート
・店員はより多く購入してほしいため，３点セット（ジャケット・スカート・ズボン）を勧めるが，面接ではスカートを着用したほうが，面接員の印象が良いとアドバイスしている。「印象が良い」という店員のアドバイスなどから，大学生は敏感に衣服に対する固定的なジェンダー意識を受け取り順応していく様相がうかがえた。

Akita University

3）インタビュー調査からわかったこと（図２）

◆女性はスカートだという固定的な意識

根拠：企業に迎合，他人の視線，周囲に同調
→実社会への順応
脚だし，自己アピール →自己主張

◆女性はズボンもOKという意識

根拠：活動的，ズボンで自己アピール（個性）
→自己主張

5．まとめ

・普段の生活ではジェンダーフリーでズボンが主流である。
・入学式や教育実習ではスカート着用を意識している。
・大学４年生になると親・メディア・就職活動本・スーツ店などから衣服に対する固定的なジェンダー意識を先取りして社会の求めに敏感に順応する。そのためスーツはスカートで決まり，となっていく。

新たな疑問⇩

◆社会にはまだまだ衣服に対する固定的なジェンダー意識があるのか？

◆社会に衣服に対する固定的なジェンダー意識があると大学生が思い込んでいるだけなのか？

これらの新たな疑問は，一般社会における幅広い意識調査・企業の面接員などへのインタビュー調査などのさらなる調査・研究によって解明できるかもしれない。

6．謝辞

アンケート調査とインタビュー調査に協力して下さった教育文化学部の２年・３年・４年・大学院の学生の皆様および教員の皆様に感謝を申し上げます。

7．参考文献

村上信彦『服装の歴史２』（理論社，1974）
村上信彦『服装の歴史３』（理論社，1974）
木下康仁『グラウンディド・セオリー・アプローチの実践－質的研究への誘い－』（弘文社，2003）
「マナーガイド」http://www.manner-guide.com/funeral/fukusou2.html
「喪服」http://www.osoushiki-plaza.com/library/sikitari/mohuku.html
「きもの倶楽部」http://www.kimonoclub.info/005/

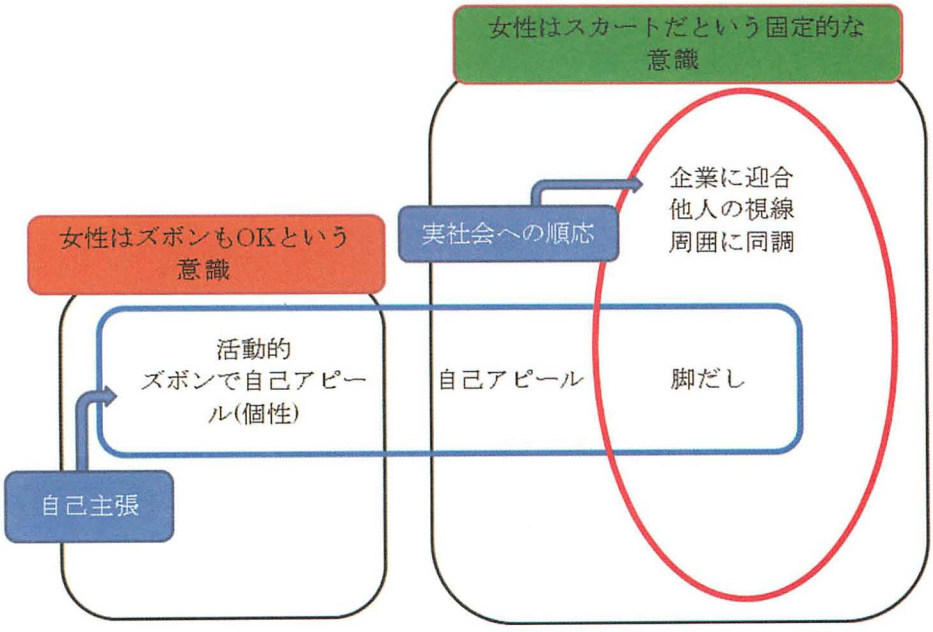


図２：カテゴリーの相関関係を構造化